若紫の君　幼き登場の意味

――「片生ひ」と菟原処女から――

久保田　孝夫

一　「若紫」巻での若紫の君の年齢

源氏物語において、若紫の君（以下この呼称で統一した）はあまりに幼い童女のイメージで登場する。

きよげなる大人二人ばかり、さては童べぞ出で入り遊ぶ。中に、十ばかりにやあらむと見えて、白き衣、山吹などの萎えたる着て走り来たる女子、あまた見えつる子どもに似るべうもあらず、いみじく生ひ先見えてうつくしげなる容貌なり。（「若紫」巻①）

この「十ばかり」について、藤井貞和氏は次のように述べる。

若紫の巻における紫上の年齢は十二ないしそれ以上である。年立信奉者は紫上十歳に固執する。しかし「十ばかりにやあらむ」（河内本ナシ）とは源氏のうけた紫上にたいする第一印象でしかない。源氏の主観である。若紫の巻の基調は、紫上を、実際の年齢より幼く、未成熟な女として描こうとするものであるから、この主観的な第一印象は、実際の年齢を見誤るところにこそ眼目がある。（中略）紫上は、初潮を見るべき年齢に達しているにもかかわらず、身体が未成熟で、まだそれを見ていないのである。②

また、同じ本の「少女と結婚」で、藤井氏はもう少し後で若紫の君と光源氏が最初に一夜を過ごす場面について次のようにいう。

『あなうたてや、ゆゝしう……』という　乳母の恐れは、初潮以前の女性を犯すことを不吉としタブーとする古代心性につながる感情であろう。

そして、また、

若紫十歳以上であることはあきらかだ。彼女はおくてなので

ある。ここにこそ作家の主張があるわけで、紫上が、唯一、源氏と添い遂げることのできた幸い人である理由を、彼女の天真爛漫な、純潔無垢な性格にもとめるわけで、年齢より幼いということは彼女のたぐいまれなる美質を意味しているとみなければならない。つまり彼女は年齢にもかかわらず童女であることにかわりない。

たしかに、物語は光源氏の目に若紫の君は「十歳くらいではなかろうか」と見えたとする。若紫は「おくて」であり、尼君にとってもそう感じられたのである。若紫の君を「十ばかり」に見据えてしまうもう一つの理由は、光源氏が若紫の君の現し身の背後に「さるは、限りなう心を尽くしきこゆる人にいとよう似たてまつれるがまもらるるなりけり、と思ふにも涙ぞ落つる。」（「若紫」巻）と、藤壺が彼の脳裏に据えられていたことによる幻視でもあったといえる。若紫の君がことのほか光源氏にとって幼く見えてしまったのは、彼の思い人藤壺との二重写しによる錯誤であった。藤壺と比べたなら、この少女は限りなく幼い。そして、光源氏自身も「まだ似げなきほどと」（「若紫」巻）、不釣り合いなほど年が離れているというのか、あるいは結婚をするには、まだ幼すぎる人物であることの懸念を漏す。そこで答える僧都も「まだむげにいはけなきほどにはべるめれば……人にもてなされて大人にもなりたまふものなれば……」（「若紫巻」）と。また尼君も「いま四五年を過ぐしてこそは」（「若紫」巻）と、僧都、尼君のどちらにも、この童女の「幼さ」や「おくて」であることの認識はある。

現今の通説は藤井氏の「十二歳ほど」説や十歳以上説に傾いているといってよいだろう。しかし、なぜ彼女がそのような性格で、また童女として登場させられなければならないのであろうか。物語作者は、それまでの光源氏の恋の対象となった藤壺、空蟬、夕顔がすべて年上であったのに対して、光源氏十八歳の時、北山で発見する若紫の君は「十ばかり」に見えた幼い童女のイメージで登場させられる。そもそも結婚に見合う十八歳に近い年齢を若紫の君に与えることを物語作者はできたはずであるのに。

彼女の幼さのイメージを表現からたどってみよう。

○「雀の子を犬君が逃がしつる。伏籠の中に籠めたりつるものを」とて、いと口惜しと思へり。（「若紫」巻）

○　尼君、「いで、あな幼や。言ふかひなうものしたまふかな、おのがかく今日明日におぼゆる命をば何とも思したらで、雀慕ひたまふほどよ。（「若紫」巻）

また年齢についても尼君のことばとして次のように見える。

○「故姫君（若紫の君の母）は、十ばかりにて殿に後れたまひしほど、いみじうものは思ひ知りたまへりぞかし。ただ今おの

れ見棄てたてまつらば、いかで世におはせむとすらむ」とていみじく泣くを見たまふも、すずろに悲し。幼心地にも、さすがにうちまもりて、伏し目になりてうつぶしたるに、こぼれかかりたる髪つやつやとめでたう見ゆ。（「若紫」巻[3]）

次のは尼君の兄の僧都ことばである。

○「むすめただ一人はべりし。亡せてこの十余年にやなりはべりぬらん。」（「若紫」巻）〔河内本系は「十余年」を「十年」とする。〕

このことを確認して、藤井氏は「紫上が十歳でないことは、実際に本文からも言えるので、紫上の母君が、亡くなって今年でもう「十よ年」にもなってしまっているであろうか、と僧都が言っているのを、見のがしてはならない。」とし、十二歳説の提示をする[4]。

二　「年立て」から

藤井氏の若紫の君「十ばかり」に対する解釈は、この若紫巻だけからみればほとんど疑義の余地はない。しかし若菜下巻での彼女の年齢が語られる。

さまざまなる人のありさまを見集めたまふままに、とりあつめ足らひたることは、まことにたぐひあらじとのみ思ひきこえたまへり。今年は三十七にぞなりたまふ。（「若菜下」巻）

と、その年令三十七歳が語られる。このとき光源氏は四十七歳であった。このことを基準に年立てから若紫巻に逆算すると、彼女は八歳となってしまう。そもそも年立てということについて大朝雄二氏は「作者が年表的な手控えなどでもって書き進めていったというような想像はむずかしいのである。つまり、年立なるものが物語の外部に先験的にあるのではなく、まぎれもなく最も物語的な動因として、物語の生成展開を支える内的な秩序に外ならないのである[5]」という。

この「内的な秩序」の綻びとして、この若紫の君の若紫巻の「十ばかり」という年齢について議論もされてきた[6]。

年立てから光源氏と若紫の君について一覧すると、

「桐壺」巻　光源氏元服　十二歳

【「桐壺」と「帚木」の間に五年間の空白】

「若紫」巻　光源氏　十八歳

若紫の君「十ばかり」《十歳としたら年齢差八歳》

「紅葉賀」巻

少納言「今年だにすこしおとなびさせたまへ。十にあまりぬる人は、雛遊びは忌みはべるものを」

光源氏　十九歳

若紫の君「十ばかり」＋?歳《年齢差八歳ばかり》

【「花宴」と「葵」の間に一年間の空白】

【「関屋」と「絵合」の間に一年間の空白】

「玉鬘」巻

女君は二七八にはなりたまひぬらんかし、盛りにきよらにねびまさりたまへり。

光源氏　三十五歳

若紫の君　二十七、八歳《年齢差七、八歳ばかり》

「若菜上」巻　正月二三日、光源氏の四十の賀

【「若菜上」と「若菜下」の間に四年間の空白】

「若菜下」巻　光源氏　四七歳

若紫の君　三十七歳の厄年での出家の願い。

《年齢差十歳》

この若菜下巻では、光源氏と紫の上が、それまでのことを述懐し、彼女が三十七歳の重厄であることとして語られる。

それまで二人の年齢差は八歳くらいであったのが、ここではその差が十歳となっている。

これに対する考えは『新編古典文学全集』の頭注「源氏との年齢差は八歳とみるかぎり、紫の上は三十九歳のはず。作者の意識的過誤か。」が一般的な見方を示しているといってよい。はたして、「若紫」巻で若紫の君は何歳であったのか。若菜下巻から逆算した八歳なのか。「十ばかり」の表現に則って十歳くらいとし、光源氏との年齢差は八歳くらいであるとするのか、はたまた藤井氏が言う十二歳であるとなるのか。

若紫の君以外にもう一人、若紫巻での年齢を逆算できる人物に明石の君がいる。彼女の年齢についての表記は明石巻に「住吉の神を頼みはじめたてまつりて、この十八年になりはべりぬ。女の童のいときなうはべりしより思ふ心はべりて、年ごとの春秋ごとにかならずかの御社に参ることなむはべる」とあるのが年齢算出にかかわる。明石の君がまだ幼い頃からこの子の将来を祈願するため住吉参詣をおこなって十八年になるというのである。若菜上巻でも入道は娘が母親の胎内にいるときに霊夢を見て立願したとあることから、この明石巻で明石の君ほぼ十八歳と考えてよいだろう。そうすると逆算して若紫巻では九歳ということになる。

次に明石の君が最初に話題にのぼった若紫巻の北山の場面を見てみよう。前播磨国守であった入道とその娘について良清が語って聞かせた内容は「代々の国の司など、用意ことにして、さる心ばへ見すなど、さらにうけひかず」と明石の入道以降の国司たちがこの娘に縁談を持ち込んだというのである。九歳の童女に「さる心ばへ見す」と求婚する国司たちがいたというのは、そうあり得ることではないだろうから、年齢的な矛盾を示しているところといえる。新編

古典文学全集の頭注は「ここは結婚適齢期の美女を登場させる必要から、前後の統一を無視したか。構想の整合性よりも局面や場面の効果を重んずることは、当時の物語に珍しくない」とするが、主要な女の登場人物である若紫の君と明石の君の二人までが、若紫巻での年齢が共通して若すぎる、あるいは幼すぎるという矛盾をもっているのである。ただ若紫巻で、良清の話しを聞いていた供人が「かの入道の遺言破りつべき心はあらんかし」と、求婚してきた国司たちというのは入道の遺言を反故にしてやれとひやかしで求婚したのだろうと戯れている。もしそうだとするなら矛盾ではなくなろうが、求婚者に対して入道が「さらにうけひかず」と真顔で対応していること、また「わが身のかくいたづらに沈めるだにあるを、この人ひとりにこそあれ、思ふさまことなり。もし我に後れて、その心ざし遂げず、この思ひおきつる宿世違はば、海に入りね」と本音で遺言しているようすを考え合わせるなら、供人のことばは、その場のたんなる囃子ことばに過ぎないと考えてよいだろう。

今この若紫巻での年齢について、少し視点を変えたところから考えてみたい。

三　「片生ひ」と「片成り」

若紫の君が幼い童女のイメージで登場させられているのはすでに述べてきたが、それを補完するように末摘花巻の終わり近く、二条院につれてこられた若紫の君を次のように語る。

Ⓐ　二条院におはしたれば、紫の君、いともうつくしき片生ひにて、紅はかなうなつかしきもありけりと見ゆるに、無文の桜の細長なよよかに着なして、何心もなくてものしたまふさまいみじうらうたし。（「末摘花」巻）

「片生ひなり」の語は、「未成熟」の意味で解されている。『岷江入楚』は「かたおひ」に「紫上いまだ成人の人ならねば、おひとゝのほらねどもうつくしきしたぢといふ也、かたなりとも有」と「片成り」を「片生ひ」の類義語とし、また『湖月抄』は、この個所に傍注して「片生也形の未調也」とする。これらに対して、萩原広道『源氏物語評釈』は万葉集一八〇九番の歌の例を引いてから「この物語末にはかたなりともいへり」と言う。一見両者が同義であることを言っているように見えるが、物語の末では「片成り」と言うようになっているとする。

それでは、源氏物語中の用例を見てみよう。「片生ひ」は三例、「片成り」は一一例[7]。

まず、これらの用例について表にしてみる。この表の残り二例の「片生ひ」は、

Ⓑ　女君こそ何心なく幼くおはすれど、男は、さこそものげなきほ

源氏物語の「片生ひ」と「片成り」〈小学館新編全集本〉巻名，巻数・頁，年齢を上から順に示す。

	紫上	女三宮	夕　霧	雲居雁	冷泉帝	明石姫君	頭弁 兵衛大夫君	鬚黒の大君	夕霧の六君	盤介の次女
片生ひ	末摘花 1・305 12才	若菜上 4・27 13〜4才	少女 3・33 12才	少女 3・33 14才						
片成り		《女三結婚》 若菜上 4・63 13〜4才		少女 3・54 14才	賢木 2・125 6才	玉鬘 3・114 7才	若菜上 4・137 ？才	竹河 5・99 ？才	宿木 5・420 21〜2才	東屋 6・79 15〜6才
		若菜下 4・184 21〜2才							宿木 5・467 21〜2才	
		若菜下 4・249 21〜2才								
死別等	母死別 按察大納娘 若紫以前 1・212	母死別 藤壷女御 若菜上以前 4・18	母死別 葵上 葵 2・47	母別離 按察大納言と再婚 乙女 3・33						

どと　見きこゆれ、おほけなくいかなる御仲らひにかありけん、よそよそになりては、これをぞ静心なく思ふべき。まだ片生ひなる手の、生ひ先うつくしきにて、書きかはしたまへる文どもの、心をさなくて、おのづから落ち散るをりあるを、御方の人々は、ほのぼの知れるもありけれど、何かは、かくこそと誰にも聞こえん、見隠しつつあるなるべし。（「少女」巻）

幼恋の手紙のやり取りをする夕霧と雲井雁が「片生ひ」の対象として捉えられている。

若紫の君は「片生ひ」ではあっても「片成り」と形容されることはなかった。その一方、両方の語で形容されている人物は前表からも雲井雁と女三宮がいる。ただし雲井雁の「片なり」については、夕霧との間柄に危険なものを感じた内大臣（雲井雁の父）によって隔てられるとき「十四になんおはしける。片なりに見えたまへど、いと児めかしう」（「少女」巻）とあり、「片成り」に見えますけれど、まだたいそう「児めかしう」あるというのであるから、それは後で述べるように、まだ「片生ひ」であるとの認識の上に立っている表現と見ることができる。次に女三宮に対してのものである。

Ⓒ　姫宮（女三宮）いとうつくしげにて、若く何心なき御ありさまなるを見たてまつりたまふにも、（朱雀院は）「見はやしたてまつり、かつはまた片生ひならむことをば見隠し教へきこえつべから

む人のうしろやすからむに、預けきこえばや」など聞こえたまふ。おとなしき御乳母ども召し出でて、御裳着のほどのことなどのたはまするついでに、（「若菜上」巻）

女三宮はあきらかに「片生ひ」と「片成り」をまとめた表から読みとれることにふれておきたい。女三宮は「片生ひ」とも「片成り」とも描かれるが、それは「片生ひ」から「片成り」への移行と読みとることができる。その境をなすのが光源氏との結婚である。つまり結婚する前の未成熟さに対しては「片生ひ」と表現され、結婚後においてもまだ未成熟な幼さの見られるものに対して「片成り」とあらわされているのである。もう一例「片生ひ」と「片成り」であらわされる乙女巻の雲井雁は、先に述べたように、彼女は夕霧との結婚を果たしていない段階でのことであり「片成り」に見えるが、まだ「児めかしう」ある「片生ひ」なのだと述べているのである。「片生ひ」から「片成り」への間には結婚という儀礼が置かれていると見るべきであろう。

四　菟原処女・離別と「片生ひ」

それでは次にこの「片生ひ」の用例を他にも見てみよう。「片生ひ」の用例で最も早い例として認められるのは、万葉集で高橋虫麻呂が菟原処女伝説を題材にした歌である。

葦屋の　菟原処女の　八歳子の　片生ひの時ゆ　小放りに
髪たくまでに　並び居る　家にも見えず　虚木綿の　隠りて居
れば　見てしかと　いぶせむ時の　垣ほなす　人の問ふ時　千
沼壮士　菟原壮士の　廬屋焼き　すすし競ひ　相よばひ　しけ
る時には　焼き太刀の　手かみ押しねり　白真弓　靫取り負ひ
て　水に入り　火にも入らむと　立ち向かひ　競ひし時に
我妹子が　母に語らく　倭文たまき　賤しき我が故　ますらを
の　争ふ見れば　生けりとも　逢ふべくあれや　ししくしろ
黄泉に待たむと…⑧

この「葦屋の菟原処女」は「八歳」の「片生ひの時」から大切に育てられたというのである。「八歳」の「片生ひ」という結びつきを源氏物語の若紫の君に引き合わせてみることができよう。末摘花巻で「片生ひ」とされた若紫の君、そして若菜下巻で三十七歳であった彼女の年齢を年立てを通して逆算すると、若紫巻ではちょうどその八歳になることに気付かされる。それでは、若紫巻では年立てのように八歳であったのか。この菟原処女伝説は源氏物語の宇治の物語で入水する浮舟に影を落としていることは多く指摘されてきたものである。この伝説が若紫巻にも認められたとしても何ら支障はないであろう。

今少し分析と用例を見てみることにする。

菟原処女では「賤しき我が故」「母に語らく」とある。彼女の父の存在が見えてこないのは父の不在なのであろうか。一方『大和物語』では「親ありて」とあり「親のいふやう…このをさなき者なむ、思ひわづらひにてはべる」と親の存在はあるが、それが片親なのかそうでないのかはっきりしない。また『大和物語』はこの物語の最後に、歌人「伊勢」がこの物語に寄せた歌をのせる。「伊勢の御息所、男の心にて」と詞書して「かげとのみ水のしたにてあひ見れど魂なきからはかふなかりけり」。この伊勢の詠じた歌が万葉集の例の次に古い「片生ひ」の用例となる。

それは『伊勢集』第一類本の西本願寺本三十六人集系、二八二番では「かたおもひ」とあるが、以下の二系統には「片生ひ」とする。

第二類本　群書類従本系、二八一番

人のちいさき子をこれ子にせよとてをこせ給へるに女

かた時の人を見しまになるものはたゝかたおひになるそ恋しき

第三類本　歌仙歌集本系、二八三番

人のちいさきを、これ子にせよとてをこせたりければ

かたときの人をみるたにによる物はたゝかたおいに成そわひしき⑨

状況の取りづらい歌であるが『伊勢集全釈』は「なにかの絵か物語かの一場面を詠んだものであるのかもしれない⑩」としている。歌意は、男がこの子をあなたの子にしなさいと言ってよこしたが、その子は男が他の女に生ませたまだ「片生ひ」で、十分成長していない子どもであったと言うことになろう。「ちいさき」ことと代わりの母となることとの関係から、生みの母親存在の希薄さが窺える。男が女に預けなければならないという行為には、生みの母親の生別死別にかかわらず不在感が見え隠れしよう。とすればそこに「片生ひ」の属性のひとつを見ることができそうである。それは前掲の表で示したように、源氏物語が「片生ひ」で形容する人物、若紫の君・夕霧・雲井雁・女三宮すべてが母親との生別ないしは死別を被った人物たちであった。そうなると、母親の欠損の中で育った子におこる現象として「片生ひ」があると見ることができそうである。すでに述べたことと合わせてまとめてみよう。「片生ひ」とは、母親欠損の状態で育った結婚前の者に対して用いられ、「片成り」とは、結婚した後においてもまだ幼さの残る未成熟が顕著な者に対しての形容と言うことができそうである。

もう一例『夜の寝覚』の例を見てみる。

姫君は、萩の御衣ども、同じ打ちたるを上に着たまへる、いささか、片生ひのなりあはぬほどともなく、いみじくはなやかに、にほはしく見えたまふ⑪。

これは、先の用例の雲井雁の場合と同様の、そうではないと否定

する用いられ方である。

この姫君の母寝覚の上がわが子三人の成長をいつくしみ思う場面であり、その成長が「片生ひ」ではなく、未成熟な幼すぎるところのない成長を遂げているとした用例と考えることができる。[12]

五　若紫の主人公性

それでは何故若紫巻で若紫の君を「片生ひ」の童女として、十八歳の光源氏にはそれほどふさわしくない年齢の人物として登場させたのであろうかという最初の問題に立ちもどってみよう。

「紫上のヒロイン性」について円地文子氏から疑義も出されているが[13]、それは、源氏物語はときとして、物語の主人公を特質した表現で描き出すが、この若紫の君にはそれがないことに起因する。この特質表現は古物語りのひとつの系譜といってもいい。その象徴ともいえるのが、この物語の主人公光源氏であり、彼の永遠の思い人である藤壺に冠された次の表現である。

世の人光る君と聞こゆ。藤壺ならびたまひて、御おぼえとりどりなれば、かかやく日の宮と聞こゆ。（「桐壺」巻）

自ずから兼ね備え持つ、物語の主人公としての「聖性」を持っていると物語は語るのである。それは、光源氏を「光る君」、そして藤壺は「輝く日の宮」としている。まさに光りや輝きにとして象徴されるものであった。

しかし、この若紫の君には女主人公たるそれらしきものはないのである。しかし彼女のその幼さそれ自体が聖性そのもので、そうであることを具備しての登場だったと考えたい。

阿部寛子氏は菟原処女に関して「小放りに髪たくまで」とは成人儀礼としての結髪をするまでを意味していると解されており、求婚されるまでのその期間は「隠りて居」る時間、つまり「神に仕える童女が、物忌のため世間に姿をみせずに隠っていること」[14]であるという。童女が巫女性を担った者であったとする。これは先の藤井氏の「初潮以前の女性を犯すことを不吉とした古代心性につながる感情」が働いていたとするのに通じるところがあろう。また、「世づく」とは聖性を失うことと同義であり、「世づかぬ」ことこそ聖性を保持していることにつながるのである。[15]

原岡文子氏は若紫の君の「『眉のわたりうちけぶり』とは、末摘花の巻の叙述と響き合いつつ、まだ成年に向かって秩序化されていない童女のけぶるような混沌を鮮烈に刻印する言葉なのであった。」とし「世俗に浸されることのない力を湛える女君であるためにこそ、紫の上は荒ぶり、抗う力を負う身体を担った少女として登場し、更に無垢と反秩序を意味する『何心なし』の語を刻印されたのである」[16]と。まさに、それは「世づかぬ」であり世俗と隔絶した「籠も

り居」の中に養われた少女であった。

源氏物語は、菟原処女の「八歳」の「片生ひ」で神に仕え、物忌みで世間と隔絶して籠もる童女のイメージを若紫巻の若紫の君に投影しているのである。実年令が八歳である必要よりも、この幼くて童女であるイメージを付与することで「光る君」や「輝く日の宮」と対峙する若紫の君の聖性あるいはヒロイン性とでもいうものを語っているのであり、それは「片生ひ」であることによって示された切り口を通して看取ることができるものであった。たった一例しかない「片生ひ」ではあるが、それを支える若紫の君の幼さの強調は執拗になされているのである。若紫巻での彼女の年齢は十二歳であるか、十ばかりであるかそれとも八歳であるかということより、若菜下巻で三十七歳の厄年である彼女が、そこでの物語が要求する年齢であったなら、それはそれとして我々は享受すればよい。若紫巻で十ばかりであるということの背後に何を読み取ることができるかを考えるべきなのであろう。若紫の君の成長を見守るべき「女の隠り」期間、聖なる少女の時間から彼女は「世づく」世界に引きづり出されたとき、そこには女三宮に見られるような「片生い」は認められなくなっていたのである。

注

① 『源氏物語』の本文は「新編日本文学全集」を用いた。この「十ばかりにや」の諸本は、青表紙本系「十ばかりにや」（御・肖）。他は「十ばかりや」。河内本系「十ばかりやあらむとみえて」。別本系で陽明文庫本が「さては、わらはべぞいでいりあそぶ中に、しろききぬ、やまぶきなどのなれたるきて、はしりきたる女ご十ばかりにやあらんみえて、いみじくおいさきみえて…」で、ほぼ同じと考えてよいであろう。

② 藤井貞和氏「タブーと結婚」ちくま学芸文庫『物語の結婚』所収一九九五年十月刊。初出は「国語と国文学」一九八〇年一〇月。

③ 「十ばかりにて」の部分の諸本は、青表紙本系「十二にて」（榊・肖・三）。別本系の陽明文庫本「こひめぎみも、十ばかりにてぞ殿にはおくれ給へりしかど」

④ 『物語の結婚』「少女と結婚」（文庫）

⑤ 大朝雄二氏「年立と構造」（解釈と鑑賞別冊『講座日本文学　源氏物語下』所収）至文堂、昭和五三、五・「源氏物語の方法について　ての試論」藤女子大学『国文学雑誌』二号・『源氏物語正篇の研究』「年立の論」

⑥ 最近では、平成十五年度中古文学会秋季大会（於：同志社大学）で望月郁子氏による「紫上の実年令」の発表があり、若菜下巻の紫上の「三七にぞなりたまふ」こそ実年令として確実であり、それによる限り光源氏との年齢差は一〇歳となり、若紫巻では彼女の年齢を八歳としなければならないとする。数字的には確かにそうなるが、ここでは八歳になることの意味を考える。

⑦ 拙稿「紫上の『片生ひ』と成人儀礼―『片生ひ』と『片成り』を軸にして―」（『都城研究の現在』平成九年、おうふう刊所収）。なお、用例等についてはすべてこれに再録し分析をおこなった。また本稿ではその

一部の重複と補正をおこなった。

⑧「万葉集」巻九・一八〇九　小学館新編日本古典文学全集による。他にこの伝承を基にしたものに、同じく万葉集の田辺福麻呂の一八〇一～一八〇三。『大和物語』一四七段があり、当時かなり広く膾炙されていたものと考えてよいだろう。他に『謡曲』「求塚」や『夫木和歌抄』一六五七五に「あしのやのうなゐをとめがやとせごのかたおひの時にこばなりのかみたくまでにならびゐて」とあり、余野子『佐保川』一一五に「うなゐ子のかた生のときゆ」などがある。

⑨『伊勢集』（『私家集大成』）

⑩『伊勢集全釈』（関根慶子、山下道代氏、私家集全注釈叢書一六　風間書房　平成八年二月）

⑪『夜の寝覚』巻五、小学館新編日本古典文学全集本

⑫ただ、『宇津保物語』の次の二例は、ともにまだ未婚であることから、これまでの分類にはあてはまらないことになる。本文は室城秀之『うつほ物語』おうふう刊。

○姫宮（朱雀院の末の女四の宮）も起き上がり給へるを、これは、まだ小さく、片成りにて、貴なり。（国譲・中、七二五頁）

○宮（大宮）、「朱雀院は、『一の宮よりまさるはなし』とぞ思したなる。それは、小さくより思しつきたればにこそ。かの宮（后の宮腹の女三の宮）、さらに劣り給はざなる。まだ片成りにて、いとをかしげにおはすなり。今少しねび（成熟）給はば、いとようなり給ふべき人にこそ。」（国譲・下、七五六頁）

それ以外の次の用例は否定形のものであることから問題はない。

『栄花物語』（松村博司『栄花物語』角川全注釈）

○同じ御門と申しながらも、いかにぞやかたなりに飽かぬ所もおはしますものを、この上は、いみじう御かたちより始め、清らにあさましきまでぞおはします。（「輝く藤壺」）

御門の一般論では「片なり」の御門もあるが、この一条帝はそうではないことを述べている部分である。このとき一条帝は歳が「ただ今ぞ廿ばかりにおはしますめる。」とある。

○今年十にこそおはしますらめ。見奉らせ給ふに、かたなりならずうつくしくおひ整ほらせ給へるも（「音楽」富岡家旧蔵本のみ）

一品宮禎子内親王はこの時十歳であるが、「片なり」ではないこと、それが「うつくしく」としてとらえられている。「片おひ」に多く用いられている「うつくし」があらわれた用例としておさえておきたい。

『夜の寝覚』（小学館新編日本古典文学全集本）

○その夜になりて、おはしそめぬ。御心ざしおろかなりとなけれど、ならひしに寝覚の、ありしに変はるけぢめもなし。昼見たてまつりたまへば、二十に一つばかりや余りたまひつらん、かたなりなるところなくとのひ果てて、程すこしそぞろかなれど、見苦しうもあらず。頭つき・様体いときよげにて、あざやかに気高く、きよらなるかたち、もてなし、有様も、心恥づかしげに、よしある気色ぞ、人にことなる。（巻一・五五頁）

○中納言（一九歳）が大君（二一歳）との結婚の日取りが決められたのに際し、はじめて大君の所を訪ねてその姿を見る場面である。「片成り」ではないことが、背が少し高いが見苦しくはないこと、また「きよげ」であるとしている。

『とりかへばや物語』岩波新体系本

○十二におはすれど、かたなりにをくれたる所もなく、人柄のそびやかにてなまめかしきさまぞ、限りなきや。（巻一・一一〇頁）

実は男である姫君の様子を描いた部分である。ここも「片成り」ではない場合を指している。「をくれたる所もなく」「そびやかに」「なまめ

かしき」と形容されている。

○中納言は十六、女君は十九にぞおはすれば、かたちも心もかたなりなる所なくよきほどにに、年よりはじめ、飽かぬ所もなくめでたくて、……（巻一・一二〇頁）

男装の中納言と、女君は四の君を指す。同じく「片成り」ではない場合で、「よきほどに」「年よりはじめ」「飽かぬ所もなくめでたく」とあり、「年よりはじめ」と年齢の面が強調されている。

次に時代は下がるが、永正七年（一五一〇）以前の成立かといわれている「松帆浦物語」（群書類従本）の例をみてみる。

此人のまだかたなりなりし頃、殿上などにてほのみ給しこゝちせしは、ことの数にもあらず。まほにも見まほしくおぼへ給へど、はぢらひたるさまなれば、心もとなくおぼすほどに、やがて御心とまりて、心につくべきあそびをし給ひつゝ、かたときさらずあひかたらひ給ひける。

主人公藤侍従（一七歳）をめぐり、岩倉の宰相と左大将の三角関係の男色の物語である。藤侍従が何歳の時の「かたなりなりし頃」であったかは語られていないが、左大将が殿上で藤侍従を見た時のことである。

大隈言道『草径集』文久三年（一八六三）刊

三栗

六八六　みつのうちのみなしぐりこそかなしけれかたなりにだになりおくれつつ

⑬　円地文子氏『源氏物語私見』昭和四九、新潮社

⑭　阿部寛子氏「入水する女―菟原処女の場合―」（古代文学講座4『人生と恋』勉誠社、平成六年）

⑮　西郷信綱氏「古代的世界の終焉」（『源氏物語を読むために』昭和五八、平凡社）。また秋山虔氏「紫上の初期について」（『源氏物語の世界』所収。東大出版会、昭和三九年一二月）で「係累のない王孫という素性は、愛情関係が多かれ少なかれ世俗世界の進退と相関わるような他の女性たちとちがって、ただ純粋な愛情関係のみによって存在理由をもつことのできる一つの資格でもあっただろう」と述べている。

⑯　原岡文子氏「紫の上の登場―少女の身体を担って―」『日本文学』平成六（一九九四）年六月